

環日本海学会第13回学術研究大会

ERINA調査研究部研究主任 三村光弘

立命館アジア太平洋大学（APU）での開催

2007年12月7日～8日、大分県別府市の立命館アジア太平洋大学（APU）で、環日本海学会第13回学術研究大会が開催された。この大会のテーマは「アジア太平洋の中の北東アジア」であった。第1日目は午後から恒例の国際シンポジウムが「アジア太平洋の中の北東アジア」と題して行われ、東アジアの大きな枠組みの中での北東アジアが持つ意味について、赤尾信敏（日本アセアンセンター事務総長・元外務省在タイ日本国大使館特命全権大使）氏が主題発言を行い、交流団体である韓国の北東亜経済学会からの代表団や会員によるパネルディスカッションが行われた。

若手を育てる場としての学会

第2日目は、分科会と会員総会が行われた。分科会では「北東アジアとアジア太平洋」、「政策」、「教育・文化」、「経済」、「物流・交通」、「The Japan Sea Rim Area in Asia and the Pacific」の6つの分科会に分かれて20本を超える発表が行われた。APUの特徴を生かし、英語で発表する分科会が行われたのが今回の特徴であった。分科会発表では、古株・中堅の研究者の他に、研究者として初めての発表を行う若手の発表が数多く見られた。1998年の第4回大会で初めての発表を行った記憶を持つ筆者にとっては、「学会における議論は彼らの研究の役に立っただろうか。」「彼

らの研究者としてのキャリアにとって、今回の大会がどのような意味を持っているのか。」を自問自答しつつ、自らの研究の原点を再び確認させられる分科会となった。彼らの発表にコメントすることができる喜びと、緊張感のため、午前中の分科会が終わったときには、かなりの疲労を覚えた。

「北東アジア学会」に名称変更

会員総会では、現在「環日本海学会」となっている学会名称を、「北東アジア学会（英文名：The Association for Northeast Asia Regional Studies）」と改称する理事会提案が出され、賛成多数で可決された。学会誌の名称も『環日本海研究（Journal of Japan Sea Rim Studies）』から『北東アジア地域研究（Journal of Northeast Asian Studies）』と名称変更が行われることになった。学会創設当時から議論の対象であった名称であるが、昨今のこの地域の研究が「環日本海」から「北東アジア」という名称に移行している現状から、最終的にはかなりの会員が旧名称を惜しみながらも現状に合わせる道を選んだと言うことになるのだろう。

来年度の大会は、山形大学で開かれる。今後、新しい「北東アジア学会」が、その新名称に相応しく、幅広い地域研究者が共に育っていく場になることを願いつつ、会場を後にした。